

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

国語 第130号

— 高等学校，特別支援学校対象 —

平成26年4月発行

「現代文B」における学習内容の関連を踏まえて読む能力を育成する工夫 — 論理的な文章を教材として —

高等学校学習指導要領国語科における「現代文B」について『高等学校学習指導要領解説国語編』（平成22年6月）には、次のように記されている。（下線は筆者。以下同じ）

国語は、論理的な思考をはじめとする知的活動、コミュニケーション、感性や情緒の基盤として、生涯を通じて自己の形成にかかわるとともに、社会への参画、文化の継承と創造などに寄与する役割も果たすものである。言語などによる情報の量的拡大と質的变化が進む中で、国語の能力を育成することに対する社会的な要請は一層高まっている。

「現代文B」は、このことを踏まえ、これまでの「現代文」の内容を改善して置いた選択科目である。

高等学校においては、社会人として必要な国語の能力の基礎を確実に育成することが求められている。「現代文B」においては、高校生が将来社会人となることを見据えて、社会人として必要な論理的な思考力等を育成することが重要である。

そこで、本稿では、「現代文B」の「読むこと」の領域において、論理的な文章を教材とし、「文章の解釈」、「考えの形成」という二つの学習内容を関連付けて読む能力を育成する学習指導の在り方について述べる。その際、具体的な実践例を示しながら、「現代文B」の指導事項、学習内容の関連を踏まえた指導、指導と評価の一体化の3点から説明

する。

1 本実践における「現代文B」の指導事項

本稿で示す実践例においては、「現代文B」の指導事項ア～オのうち、次のアとウを取り上げて単元を構想した。

ア 文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、その論理性を評価すること。
ウ 文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり、発展させたりすること。

「現代文B」は、共通必修科目である「国語総合」の総合的な言語能力を育成する科目としての性格を発展させている科目である。アの「要旨」を「的確にとらえ」することは、「文章の解釈」に関する指導事項であり、「国語総合」の指導事項イ（要約すること）を踏まえている。また、ウの「文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり、発展させたりすること」は、「考えの形成」に関する指導事項であり、「国語総合」の指導事項オ（文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること）を踏まえている。

本実践は、この「現代文B」の指導事項

ア及びウを踏まえて、平成25年度の当教育センターの研究協力員が行った取組を基に作成している。本研究協力員は、論理的文章の要約を通して解釈する既習単元（1学期）の学習内容と、筆者の主張に対する意見文を書いて自分の考えを深める本単元（2学期）の学習内容を関連付けて指導した。

なお、本稿で述べている「学習内容」とは、学習指導要領における「指導事項」を、生徒が主体的に取り組む内容として、言い換えたものである。

2 学習内容の関連を踏まえた指導

本実践は、「現代文B」を想定して「現代文」（『改訂版高等学校現代文』第一学習社）で行い、表1のように、既習単元と本単元との学習内容の関連を図った。

既習単元では、「文章の解釈」を学習内容とした。ここでは、200字の要約を更に100字以内にまとめた指導の例を述べる。

テクノロジーとつきあう際には、私たちの生活をよりよくするとして、安易にプラス面だけを見るのではなく、長期的な視野に立って、とりわけ、マイナス面での影響を計るという姿勢が必要である。その上で、大きなマイナスが予想される場合には、開発や購入が可能でも「あえて手を出さない」という発想が今求められる。それは二十一世紀を生きる私たちが、地球と人類の存在のために、どうしても獲得しなくてはならない英知であるといえる。

下線部が200字要約の中でもとりわけ中

心的な語句であり、これらに着目させることが大切である。「テクノロジーとつきあう」ということは、この評論の論理の展開の前提であり、「プラス面」だけを見ずに「長期的な視野」に立って「マイナス面での影響を計る」ことは、筆者の視座と考えられる。「大きなマイナスが予想される場合」は「あえて手を出さない」ことの条件であり、「『あえて手を出さない』という発想」が「地球と人類の存続のため」に必要な「英知」であるということは筆者の主張である。これらの語句が果たす論理展開上の役割に着目させ、次のように100字以内に整えさせた。

テクノロジーとつきあう際、プラス面だけを見ず、長期的な視野でマイナス面での影響を計るべきだ。大きなマイナスが予想される場合、「あえて手を出さない」という発想が地球と人類の存在のために必要な英知である。

さらに、中心的な論点である「マイナス面」に関する記述について、「開発者」と「消費者」の視点から考えさせ、次のようにまとめさせた。

テクノロジーの発展に伴い人類はマイナス面を考慮せずに開発や購入を行っているので、開発者は将来への被害を想定してあえて開発しないこと、消費者は購入によって失うものを見極め買わないと決意することが必要だ。

このことにより、「開発」や「購入」に対して「あえて手を出さない」と決意することの必要性を説いている本文の要旨を捉えさせることができた。

表1 本単元と既習単元との学習内容の関連を踏まえた指導

| 既習単元（1学期） | | 本単元（2学期） | |
|--------------|---|--------------|---|
| 単元 | 筆者の「伝えたいこと」を読み取ろう | 単元 | 評論を読んで、自分の考えを深め広げよう |
| 教材 | 「テクノロジーとのつきあい方」（池内了） | 教材 | 「動物の深淵，人間の孤独」（西村清和） |
| 学習内容 | ・ 本文の要約を通して要旨を的確に捉えること（ 文章の解釈 ） | 学習内容 | ・ 本文を批評することを通して、人間，社会，自然などについて自分の考えを深め広げること（ 考えの形成 ） |
| 単元の流れ | 1次 単元の目標を理解し，文章を読む。 2次 文章を200字以内で要約し，それを更に100字以内にまとめる。 3次 要旨を捉える。 | 単元の流れ | 1次 単元の目標を理解し，文章を読む。 2次 文章を100字以内で要約し，要旨を捉える。 } 文章の解釈 3次 筆者の意見に対する自分の考えを深める。 } 考えの形成 4次 他の生徒の意見文を読み，考えを広げる。 |

要約を通して要旨を捉える学習は、本単元においては、第2次で行った。事前単元よりも文章の難度が上がったが、全員が文章を解釈することができた。このことは、学習内容の関連による成果と考えられる。

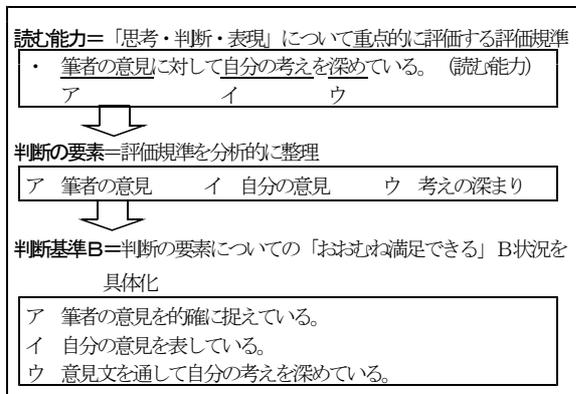
3 指導と評価の一体化

(1) 「判断基準」の具体化の実際

思考力・判断力・表現力の育成の状況については、生徒が学習内容に即して思考・判断したことを、言語活動等を通して評価する。ところが、その際「どのような要素で、思考・表現等を見るのか」「どのような尺度で到達の度合いを見るのか」が明確でないと評価が難しい。そこで、評価規準に基づいて、「思考・判断・表現」の学習状況を効果的・効率的に判断する基準を「判断基準」として設定することが望ましい。

この単元の第3次「筆者の意見に対する自分の考えを深める」（考えの形成）の学習内容であれば、次の表2のように設定する。

表2 「判断基準」の設定



「判断基準」を設定したら、それに即して、表3のように「予想される生徒の表現例」等を準備して、「判断基準」を

具体化することが大切である。

表3 「判断基準」の具体化

| |
|---|
| <p>評価規準（思考・判断・表現）</p> <p>読む能力 筆者の意見に対して自分の考えを深めている。</p> |
| <p>思考、判断に基づく表現内容（評価の対象）</p> <p>○ 生徒が作成した意見文（400字）</p> |
| <p>判断の要素</p> <p>ア 筆者の意見 イ 自分の意見 ウ 考えの深まり</p> |
| <p>判断基準B</p> <p>ア 筆者の意見を的確に捉えている。</p> <p>イ <u>自分の意見を表している。</u></p> <p>ウ <u>意見文を通して自分の考えを深めている。</u></p> |
| <p>【予想される生徒の表現例】</p> <p>私は、「自然」の多様性を見る機会として「動物園」を肯定する筆者の意見に賛成だ。しかし、人間と自然・動物は交わることはないという考え方には疑問が残る。</p> <p>確かに、動物園は「自然」の多様性を見るのには便利である。地球上の様々な動物を直接見ることができるからである。しかし、<u>日常生活においても「自然」はある。動物とも関わっている。それらと「交わることはない」と断言してしまっているのだろうか。特に、日本では、人間と自然が交わっていないのではなく、むしろ、共に生きるという考え方によって文化が創られてきたのではないだろうか。</u></p> <p>このことから、動物園が私たち孤立した人間が動物と交わる文化装置であると認めつつ、<u>「唯一の方法」という指摘には注意すべきだ。</u></p> |
| <p>C 状況生徒への指導</p> <p>(ア) テーマ、キーワード、構成等を押さえさせる。</p> <p>(イ) 全体的か、部分的かなど考える対象を明確にさせ、賛成・反対、留意など自分の考えを表明させる。</p> <p>(ウ) 自分の考えの根拠となる例、類似した具体例、他の事例への一般化等を考えさせる。</p> |
| <p>判断基準A</p> <p>・ 社会性、実現可能性、対比、時代性、場所性、他の事例等を踏まえて説得力ある表現がされている。</p> |
| <p>B 状況生徒への指導</p> <p>判断基準Aの状況にある生徒の意見文について交流させたり、判断基準Aの内容に関する問い掛けを行ったりして深化指導を行う。</p> |

判断基準Bのアは、本単元の第2次において文章を解釈したことが踏まえられているかを見る。イは、筆者の意見に対して賛成か反対かなど、自分の考えや意見が述べられているかを見る。ウは、自

分の考えを導いた根拠や、共通する他の事例などを、自分がこれまでに体験したことなどを基に表現しているかを見る。

これらの全てが表現されていれば、B状況と判断できる。不足している場合は、C状況として補充指導が必要である。B状況生徒には、A状況へと向かわせる深化指導を行うこととなる。

(2) 補充指導と深化指導

次は、補充指導を行う前の生徒作品である。

私も、動物園はヒトが実物の動物を目にすることができる唯一の機会として、かけがえのない文化装置であると思う。

理由は、筆者も述べているように、今では私たち人間の視界の周縁へと追いやられた、深層において人間と地続きの自然が、私たちの想像を超えた多様で多次元の生命を織り成していることの驚きを実感できるからである。私も実際、小さい頃に動物園に行って感じた、自分と異なる次元を生きている動物たちへの驚きや感動、興奮は今でも覚えている。確かに、動物園の動物たちは馴化していて、無気力で鈍く見えるかもしれないが、実物の動物を目にすることで、彼らの目が自分たちの視線と交差ししないことを実感できる、唯一の場所であることにはちがいない。

このことから、動物園は私たち孤立した人間が、自然や動物と交わることのできる唯一の一方式であるので、動物園はかけがえのない文化装置であるといえる。

この生徒は、判断基準BのAとIに該当する表現はあるが、Uに該当する表現がない。特に、末尾の「このことから、動物園は私たち孤立した人間が、自然や動物と交わることのできる唯一の一方式であるので、動物園はかけがえのない文化装置であるといえる。」という表現は、冒頭部分を繰り返して述べているだけであり、「考えの深まり」になっていない。

補充指導としては、この生徒自身の表現を用いて、「『自分とは異なる次元を生きている動物たちへの驚きや感動、興奮』を踏まえて考えると、動物との交わりにはどういう意味がありますか。」というように思考を促した。そのことによ

り、「共に生きているということがすばらしいと思います。」と述べるに至ったので、さらに、動物園の役割について考えさせた。すると、「動物園には人間と動物・自然が共生すべきことを学ぶという役割がある。」と、自分の考えを深めることができた。これは、判断基準BのUに該当すると考える。

深化指導は、他の生徒の意見文を読ませることにより、自分とは異なる考えなどから新たな視点を得て、自分の考えを見直すようにした。例えば、「動物と人間の交わりの難しさは、世界の各地域における異なる文化状況にある人間同士の間での交わりの難しさに通じているのではないか。」というA状況の生徒の視点を活用する。前述の「動物園には人間と動物・自然が共生すべきことを学ぶという役割がある。」と考える生徒にこの視点を紹介することで、「動物と人間が本来的に交わることが難しいからこそ、自然・動物と共生するとはどういうことなのか、グローバルな視点で考える必要があるのではないか。」という表現を導けた。これは、判断基準Aに該当すると考える。

本稿では、既習単元における「文章の解釈」の学習内容を踏まえ、本単元で「考えの形成」に関する学習を行う実践を紹介した。以上のように、単元と単元の学習内容を関連付けるように工夫することが大切である。

—引用・参考文献—

- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説国語編』平成22年6月、教育出版

(教科教育研修課)